

## 第4章 2. 地域の一員としてできること

東日本大震災では、多くの地域の人たちが避難所での生活を余儀なくされました。避難所開設当初は、電気や水などのライフラインも使えず、すぐに自治組織も立ち上がらなかったため、混乱を極めるところが多くありました。

そういった状況の中で、地域の一員として、私たちに何ができるか考えましょう。

考えてみよう

### 私たちにもできる避難所運営への協力

東日本大震災では、<sup>みやぎ</sup>宮城県でも多くの高校生が震災当日から避難所の運営などに協力しました。多くの人たちが身を寄せた避難所で、地域の一員としてどのようなことができるか考えてみましょう。

#### ●石巻高校の生徒による避難所運営への協力

震災当日、石巻高校は指定避難所ではありませんでしたが、臨時の避難所となり、多くの避難者を受け入れました。帰宅せずに学校に待機していた生徒たちは、避難所となった石巻高校で、清掃作業、プールからの水くみ（トイレ用）、診療所支援、避難した小学生との遊びなど、避難所運営に積極的に協力しました。

保健室に設置された臨時の診療所においては、生徒が診療を待つ人の案内、受付や問診の記録補助、清掃などを行いました。

震災から1週間後には、診療所の運営も軌道に乗り始め、患者さんが1日に350人を超える日もありました。

高校生たちは、避難所という大変な状況の中で、自分たちにできることを率先して行い、地域の一員としての大きな役割を果たしました。



廊下で問診する医師



診療所となった保健室で手作りの薬袋を作る生徒

避難所運営を手伝った生徒の作文

## 自分ができるボランティアを

この東日本大震災でたくさんの方が悲しい気持ちになりました。私も自宅が被災して帰ることができず、学校で避難所生活を送っていましたが、その時は何度も不安な気持ちになり、人のことよりも自分のことを優先していたように思います。しかし、友達や先生方が自分よりも周りのことを優先して考え、行動している姿を見て、このままではいけないと思いました。

私は自分ができることを考え、学校内に開設された診療所で、症状などを記入する問診票を配ったり、体温や血圧を測ったりする手伝いをするにしました。学校内の診療所にはたくさんの方が来校し、待っている間に色々なお話をしましたが、3時間かけてここ（石巻高校）まで来たことや、自分の家の状況などを話されたときは、どんな言葉をかけたら良いのか分かりませんでした。でも精一杯の笑顔で対応し、「ありがとう」と言われた時は、私自身が元気になりました。

今回の震災で大変な時、とてもうれしく思った事がありました。それは、日本各地や海外からのたくさんの支援です。<sup>ほっかいどう</sup>北海道でもたってもいられなくなって石巻に支援に来たという話は、とても感動しました。携帯のニュースでも、石巻への支援についての話がたくさん取り上げられていて、みんなが自分たち被災者のために動いてくれていることを知り、人と人とのつながりを強く感じました。私が今こうして以前のように明るく戻れたのは、そのような人々の支援があったからだと思います。

そして、この診療所のボランティアを通して多くの元気ももらい、また何か人の役に立てたという自信も得ることが出来ました。

このように、震災からはたくさんの悲しみを受けただけでなく、人の思いやり、つながりの強さを実感することができました。今後、どこかで大きな災害が発生したとき、現地で困っている人たちに1日でも早く笑顔が戻ってもらえるように、自分ができるボランティアを積極的にしていきたいと思います。

(2012年11月1日 全国普通科高等学校校長会発行 『未来への一歩』より)



診療を待つ人の案内